天使と悪魔と、毒舌執事。

翡翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使と悪魔と、毒舌執事。

【Ｎコード】
Ｎ９５９６Ｕ

【作者名】
翡翠

【あらすじ】
俺は平凡な中学生だったんだ。俺としても、そんな平凡な毎日は嫌いなわけじゃなかった。いや、むしろ好きなぐらいだったんだ。学校行って、勉強して、飯食って、友達と話して、部活して、家帰って寝る。そんな生活がずっと続いていたんだ。
ＰＲＧの世界のような天使と悪魔の抗争に巻き込まれるまでは。
そうして、俺と、俺の執事らしい天使や、味方とか敵とかの天使

や悪魔とかとの生活は始まったんだ―

プロローグ（前書き）

初投稿です。誤字脱字、変な所があると思います。すみません。

プロローグ

「アキラ様。お迎えに上がりました。」

「は？」

天使なんてＲＰＧだけの存在。

俺、高瀬晃中三は、そう思ってたんだ。俺の前に多分天使だろうと思われる、執事服を着た存在が現れる前までは。

…いや、最初はやっぱ、コスプレだと思ってたさ。でも、そいつの背に生えた翼はしっかりと動いていた。

「いや、意味不明なんですけど。え、これ、何かの宗教？それなら俺遠慮しとｋ」

「…はぁ…。」

…ため息ついたぞ、オイ。つきたいのはこっちだっての…ていうか人通りの少ない田舎だとはいえ、こんな道端で執事服着て、羽生やして…え、もしかして男子でコスプレとか流行りだしたの？

「ったく、なんで俺が人間を主になんて…まぁいいでしょう。アキラ様。説明をしてる暇は無いのです。　とっとと行きますよ。」

「だからお前には付いていく気無ぇって、…ってうわ、」

おいおいおい浮いたぞ！？え、これやっぱ特撮でも夢でも、コス

プレでもない――！？ちょっと待て、俺にはちゃんと家族だって居るし、友達とか親友だって居るし、あー、まぁとにかくこれ誘拐だよな？

「早めに止めとかないと捕まるぞ、お前ッ！」

「人間ごときにこの俺が捕まるとでも？」

だめだ、話が通じちゃいない。くそ、もう建物が小さくなって行く…もう降りれねぇ。

俺は、一体どこに連れてかれるんだ！？

プロローグ（後書き）

初めまして、翡翠です。中学生の作文苦手だけど小説書くのは好きな人です。

プロローグから誤字脱字、え、おかしくね？と言う所があると思いますが、コメントから注意してくださると嬉しいです。現在受験生なのでどれだけ更新できるか分かりませんが、時間のある人は見てくださると泣いて喜びます。

「説明してくれ」（前書き）

プロローグ的な前回のを合わせれば二話目です。

「説明してくれ」

「説明してくれ。」

「…」

俺が連れ去られた先は、雲の上だった。

…って言っても、雲の上にあった世界に、なのだが。

「俺は、フォルシアと申します。アキラ様、貴方の執事となるものです。」

「自己紹介はいい。…執、事？」

「えぇ。アキラ様の、です。」

何がどうなってやがる。俺は貴族でも金持ちでもない。唯の一般市民だ。

それなのに、雲の上に上って、さらに執事、だと？俺に何をさせるつもりだ。

「ふざけんなよッ！？今すぐ俺を家に帰せ、できるだろ！？」

「…だから人間は嫌いなのです。自分達の他の種族を信じない、他の種族の話を聞かない。まったく、なぜ俺が人間の執事など。…しかし俺の方もアキラ様を帰すわけにはいかないんですよ。」

「…ッ、」

そこまで言われたら黙るしか無くなる。だけどな。

「ようやく黙りましたね。ホームシックは話をせめて話を聞いてからしてください。」

せめてこの毒舌は直してくれ。

「分かったから…とっとと何で俺を連れてきたのか、お前達は何者なのか説明してくれ。」

「俺達はこの翼で分かると思いますが天使です。簡単に説明しますが、俺達天使は今、悪魔から攻撃を受けています。」

ありがちな話だ。…もちろん、現実じゃない。ＲＰＧなら、だ。

「悪魔は天界、そして人間界を牛耳るつもりです。それを阻止するためにアキラ様、貴方の力が必要なのです。…認めたくないですが。」

最後の一言は余計だろ。

「というわけで、貴方をこちらに呼び寄せました。俺の方も上に執事になれと命令されたばかりなのであまり想像しているような執事は期待しないでくださいね。」

お前の毒舌のおかげでまったく期待できてねぇよ。

「それにしてもなんで俺なんだ?俺じゃないと駄目なのかよ。他の

人でも良いんだったら一人が好きな人でも呼べよ。俺には家族も友人達も居るんだ。きっぱり言って、帰りたい。」

「他の人、ですか。無理ですね。」

「なんでだよ。」

「貴方は言うなればハーフです。それも天使と、人間のね。」

「俺、が？」

そんな話、一度も聞いたことが無い。

あの翼は隠せることが出来るのかどうかはわからないが、親父にもお袋にも翼は無かった。

「天使と人間のハーフは、天使の聖と水の力だけでなく地と風の力も操れるのです。人間界にハーフが何人居るのかは知りませんが、僅かな数です。他のハーフの人間の所には他の天使が行ってます。」

「なら、俺じゃなくても…、」

「…悪魔は人間界も牛耳るつもりなんです。ハーフの人に一人でも多く手伝ってもらえないと、人間界はその分だけ長く、より大きな危険にさらされるのですよ？」

「あ…。」

「分かっていただけましたか？」

「…俺が、いや、俺もやるしかねぇってことか？」

俺、高瀬晃は中三にして世界の命運を握る一人になっちまったようだ。

「説明してくれ」（後書き）

翡翠です。やっぱり改行は慣れません…。
上手くできてなかったらすみません。
今回も誤字脱字があれば、注意してくれれば嬉しいです。

では、また次の話で。

「意外といい奴じゃん。」（前書き）

三話目です。短め…かもしれません。

「意外といい奴じゃん。」

「取りあえず、俺達が住む家まで行きましょう。」
そう言うと、フォルシアはすぐに歩き出した。
…やっぱ、この「天界」に住むことになるんだよなぁ。家族や友達に危険が及ぶのは嫌だし、偽善者と言われるだろうが、落ち着いて考えてみたらこの世界でも何人もの人が死ぬ。一方的な侵略によって。
「なぁ。一つ聞きたいんだが。天使側は魔界に攻めて行ったりはしないのか？」
「悪魔のような低レベルの輩と一緒にしないでもらいたいですね。」
「…別に一緒にｈ「それに。」？」

「戦争など唯命を奪い合う行為、本当はしたくありませんから。…でも、それをしなければ自分の身も、知り合いの身も、相手側の死ななくて良かった身も…守れません。」

正直言って…驚いた。毒舌だけだと思ってたよ。こいつが執事かよ…とか思ったが。
「意外といい奴じゃん。」
「？何か言いましたか？」
「いーや、何も？」
「まぁいいでしょう。次に馬鹿なこと言ったら置いて行きますから。」
しっかり聞こえてたよ…。毒舌に加えて地獄耳も悪い所だな、うん。
歩くこと数分。普通の一戸建ての前に着いた。…え、住むとこマンション、とかじゃなくて？
「何マヌケな顔をしてるんですか。入りますよ？」

「いや…ここ？マジで？二人にしてはでっかくねぇ？」
「…知りませんよ。取りあえずこれが上からの命令です。」
天使と人間のハーフ。俺が本当にそれなのか？今でも信じられないが。
フォルシアの話を信じるのならば。魔法が使えて、天使以上の活躍が出来るのならば。
少なくとも俺は本当にハーフで、俺は天界にとてつもなく必要とされている。
それが今、こんな些細なことで実感できたような気がした。
「ちっくしょ。何か無視してたけど…。かなりのプレッシャーだな…」
「どうしました？早く入りますよ。これから色々勉強してもらわなければならないんですから。」
ドアを開け、中に入ったフォルシアが叫んでいる。
「あ、あぁ。今行くから待ってろー！！」
「行動は素早く。基本ですよ！？」

出会ってから約３０分。あいつの毒舌には慣れてしまったようだ。
だけど、天界と人間界を救う一人だというプレッシャーには何時までも慣れはしないのだろう。

「意外といい奴じゃん。」（後書き）

こんばんは、翡翠です。三話目にしてこれから先の展開を全然決めれていません。大変です。

今回も誤字脱字などがありましたら、よろしくお願いします。

では、次は四話目で。失礼します。

「魔法ではありません。聖法です。」（前書き）

四話目です。とりあえず、ここら辺からファンタジーっぽく…なるといいです…

「魔法ではありません。聖法です。」

「『飛翔(フライ)』…おー。」
「やっと覚えましたか。」
俺は今空を飛んでいる。天使の翼で。
この天界でなら唯の人間―といっても人間と天使のハーフだが―の俺でも魔法を使えるらしい。
「フォルシア、他には？」
「貴方の現在の聖力では…『飛翔(フライ)』と、『圧風(ウィンド)』が限界でしょう。」
「ＯＫ。『圧風(ウィンド)』！！」
片手を前に出し、魔法を唱える。風が手付近からでるが…
「弱ッ！ほんと弱いな！なにこれ空気砲並みの威力！？」
「うるさいですよ。貴方の聖力では今はこれが限界です。天界なら聖力は体力と同じように毎日練習していれば鍛えられますから鍛えてください。後、魔法ではありません。聖法です。」
…だそうだ。魔法じゃなく聖法らしい。まぁ、天使っぽいな。「魔」より「聖」の法が。
「フォルシア、お前は？どんな技が使えるんだ？」
「…見たいですか？」
「あぁ。」
「仕方ないですね。『回復(ヒーリング)』」
フォルシアが唱えたのは回復魔法だろう。俺がこれまでしてきたＲＰＧに似たようなものがあった。
「おぉ。」
思わず驚きの声を上げる。俺に向かって唱えられたそれは、俺の全身を光で包んだ。
そして、ところどころにある擦り傷や切り傷を一瞬で治し、疲れを取った。
ハーフだとしても。フォルシアと俺ではレベルが違うのだと、改

めて実感した。
「これでまだまだ頑張れますね？」
「あぁ。ありがとな。」
「別に貴方のためではありませんから。」
え、これツンデレ？ツンデレなのか？
これまで見てきたアニメや漫画からの教訓。毒舌味方キャラはツンデレと思え。
「実際に見るとは…。」
「また馬鹿なことを考えてますね？いい加減にしないと、」
「へ？」
「『弾泡（クラッシュバブル）』」
ドンッ、と幾つもの泡が俺の前で弾ける。フォルシアは全く手加減をしてないらしく、
「ぐはっ…」
俺は大ダメージを負い、飛ばされた。
「分かりましたね？」
「あ…あぁ…ぐふっ。」
そのまま倒れこむ。いや、俺に強い生きる決意がなければこれは死んでたな。倒れるとかじゃなく。
「仕方ありませんね。『回復（ヒーリング）』」
「…っはぁ…死ぬかと思った…。」
「まぁ、いっそ殺してあげようかと思いましたから。良かったですね、死ななくて。」
お前…俺達が一人でも多く必要なんじゃねぇのかよ…
「くっそ…早くお前より強くなってやる…」
「頑張ってください。しばらくの間は無理でしょうから。」
あの大ダメージからの、ここまでの回復。確かに無理かもしれない。
…いや、絶対無理でもやってやる！あの毒舌執事を驚かしてやる…！

「くそ、待ってろよ…」

怒りの感情がありながらも、楽しい時間。
ある意味人間界と変わらない生活に、俺は安心していた。
でも今俺が必要とされているのは、「戦争」のせいで。
自分達を守るなら、相手を殺す覚悟だって必要なんだ。
それを俺は忘れていた。

「魔法ではありません。聖法です。」（後書き）

次こそはバトルを書きたいです。
何かシリアスっぽく誰かを殺す～とかありますが…
殺すかどうかは未定ですｗマジです。

「正々堂々勝負しようぜ！」（前書き）

四話目です。誤字脱字などがあったら連絡してくれるとありがたいです。

「正々堂々勝負しようぜ！」

「一休みするか…」
特に俺以外のハーフに会う事無く、何の発展も無いまま連れて来られてから数日がたった。
あれから聖力は少し上がったらしく、空気砲並みの威力だった『圧風（ウィンド）』は、
「…その前にもう一発。『圧風（ウィンド）』ッ！！」
とりあえず一本ぐらいなら木を倒せるようになった。
聖力はＲＰＧで言うＭＰと一緒で、聖法を使うことで少なくなるらしい。
「ついでに言いますと、一日たち、睡眠をきちんととれば元に戻ります。」
「どっから現れた。あと人の心を読むな。もしかしてそれも聖法なのか？」
「そんな聖法などありません。」
こいつの毒舌にもまぁまぁ慣れてきた。…しかし、フォルシアの次の言葉は、
「それより、…悪魔が攻めてきました。アキラ様、行きますよ！」
「―！！」
悪魔が攻めてきた、という一言。
「（いつか来るとは思ってたが…一週間待ってくれねーのかよ…！）」
「場所はここから１ｋｍ。空を飛べば十分かかりません！」
「分かった！『飛翔（フライ）』」
ばさっ、と天使の羽を羽ばたかせ空へ。
しばらく飛ぶと、天使と悪魔が戦っている場所が見えた。
「…ッ」
「アキラ様！向こうから一人で悪魔が…、」

「一人！？なんでだよ！」
「おそらくあの悪魔が今回の作戦を指揮しているのだと思われます！」
確かに、その悪魔は他の悪魔に比べてオーラが違うようだった。
天使達と戦っている悪魔より、強い目、そして大きな翼。固い意志。
「アキラ様がハーフだと感付かれたか…！仕方が無い、行きますよ、アキラ様」
「あぁ…。」
近づいてきた悪魔は、巨大な槍を手に持っていた。
「魔界帝国軍第四師団長、エストラ！そこの者はハーフだな？勝負だ！」
「あいにくとこのお方は先日この世界に来たばかりでね。俺が加勢させてもらいます。」
エストラ、と名乗った悪魔はいかにも強そうだ。立派な髭が生えている。
「かまわんさ。二人とも俺が殺す！」
「できるものでしたらね。ほら、行きますよ！ぼーっとしてないで！」
「あ、あぁ！エストラ、だっけな？俺の名前は高瀬晃！正々堂々勝負しようぜ！」
悪魔に正々堂々とかあるのだろうか。今思った。
「ふ、その心意気や良し！殺すのはもったいないが、仕方がない。行くぞッ！」
お、やっぱ悪魔でもこういう奴は居るんだな…
「なにを言ってるんですか…聴いてるこっちが恥ずかしいですよ…」
「別にいいじゃねぇか！悪魔でも結構真剣勝負とかやってくれるんだなー。」
「アキラと言ったな！喋っている場合か？来ないのならこちらから行くぞ！」

「え、あ待って…今更だけどさっき殺すって…」
「当たり前でしょう。相手にとって我々は邪魔ものですから。」

そう、これは遊びじゃなくて戦争。
殺されるかもしれないし、殺すかもしれない。
ただ。…そう、今の俺に敵を殺す覚悟があるのかと聞かれれば。
俺は…多分答えられない。

「正々堂々勝負しようぜ！」（後書き）

作「今回から登場人物に参加してもらいます！」
フ「…今回バトル…じゃ無かったんですか？テンション上げても誤魔化せません」
作「まぁ…ちょっといろいろあったんだよ！」
フ「単に計画立ててないだけでしょう。」
作「…すみません。今度こそバトルしますｏｒｚ」
フ「きちんとしてくださいね。読者が限りなく０に近いんですから。」
作「はーい…」

「少なくとも貴方よりは。」（前書き）

間が開いてしまいました（汗
半端なく中途半端です…すいません

「少なくとも貴方よりは。」

「ぐ…ッ、」
「本当に来たばかりなのだな。だが、手加減はせんぞ。」
エストラに圧倒される俺。フォルシアの手助けが無ければとっくにやられてるだろう。
「貴方にアキラ様は倒させません。『天武装（ホーリーウェポン）』」
どこから出したのか、フォルシアは細い、レイピアを構える。
「ふむ。なかなかの上級呪文―貴様、只者ではないな？」
上級呪文とか分からない。とりあえず、俺はフォルシアに守ってもらっている。
「何故貴様程の奴がハーフの面倒を見ている？不思議だな。」
「貴方には関係ないことですよ。」
「フォルシア、お前そんなに凄い奴なのか？」
「…当たり前でしょう。少なくとも貴方よりは。」
まぁ、そりゃそーだろーよ。
「話している暇があったら攻撃してください！」
「あぁ、そうだな！『風圧（ウィンド）』！」
手から放たれた風が、エストラの体制を崩す。
その間にフォルシアは手に持ったレイピアでエストラを攻撃する。
しかしエストラも体制を崩しながらそのレイピアを自らの槍で防ぐ。
「（なんつーハイレベルな戦いだ…！）」
木を一本倒せるほどの威力になったはずの『風圧』が体制を少ししか崩せない。
体制が少し崩れた間に何度も繰り出されるレイピア。
そしてそのレイピアを防ぐ槍。
俺が簡単に手を出せる戦いではない。けれど。
（話している暇があったら攻撃してください！）

そういえば『風圧』を繰り出したのはその言葉を言われたからだな、と思い出す。
何にもしないよりましだ。またフォルシアに文句を言われたら適わない。
そう、少しでも役に立てるのなら。
「『風圧』、『風圧』、『風圧』ッ…！」
威力が弱かろうと何度も繰り出せば、体制をもっと崩せるはずだ。
俺は何度も繰り出す。相手にとって微弱な風だろう聖法を。
「…意外と邪魔だな。『魔罠（ダークトラップ）』」
「なっ…！？」
「ちっ…！！」
舌打ちしたな今。…じゃなくて、俺に向かって飛んできてるこれはなんだ…！
「避けてくださいっ…！」
「いやいや、避けれるモンなのか！？」
とりあえず危険なもんだ。避けれるのなら避けたい。
「うおぉぉぉ！！」
上昇。…おい、あれ追いかけてきてるぞ。
「ほう。とりあえずは避けれるか。なかなかに運動神経は良いようだ。」
伊達に体育で5取り続けただけはあるだろ！
「続けて避けてください！」
「あぁ！」
しかし、何時までたっても追いかけてくるな。いい加減体力…って、
「フォルシアッ！」
「…分かってますとも。…ハっ！」
フォルシアの背後に迫るエストラ。戦闘が終わるまでこれ続けんのかな、俺。
「ったく…唯の足手まといですね…『聖壁（ホーリーウォール）』」

「うぉわ！」
「むん…。」
フォルシアの前―、エストラとの間に透明な壁が出来た。
「『弾泡（クラッシュバブル）』衝撃が来ますからね！」
壁のおかげで出来た隙で魔法を天法で相殺する。壁は、かなり広い。
「…っ、」

お前はあまりにも無力だ。分かってたはずだろう？
そう問いかけてきたのは自分自身なのか。
分からない。唯、その問いは残酷なほど正論で。
強くなりたい。自分のせいで誰かを傷つけてしまう前に。

「少なくとも貴方よりは。」（後書き）

作「バトル、書くのは好きなんだけどね…」
晃「文章が下手なんだろ。」
作「毒舌はフォルシアだけで十分だ！」
晃「なんか逆切れされた！」
作「完結するまでに文章うまく書けるようになりたいな…」
晃「がんばれ。お前…受験生だけどな。」
作「…」
晃「しかも夏休みは部活の練習でかなりつぶれるしな。」
作「知ってるよそのくらい！全部がんばるから！見てろよ！」

「意外とそれが防ぎにくいと思うぜ！？」（前書き）

なんか色々飛びますw
結構おかしい所があります、ごめんなさい。

「意外とそれが防ぎにくいと思うぜ！？」

「…くそ…！」

その後も俺は足を引っ張り、戦いは続いている。

「（なんでフォルシアは俺なんかを連れてきた！？）」

まぁ、いきなりこんな強い奴と戦うとは思ってなかったのか、とも思ったが。

フォルシアは足を引っ張ることに対してあまり言ってこない。

もとからこうなるのが分かってたかのように。

そして、この戦場から邪魔だと言って俺を逃がそうとしない。

俺が勝手に逃げ出せば、単にフォルシアの足手まといになるだけだが、

フォルシアなら俺をこの場から脱出させることは簡単なような気がする。

というか、そうして一人で戦った方が、俺を守らなくていいし実際簡単だろう。

「なんで…、だ？」

不思議でたまらない。それでも、逃げ回りながら戦う。

そのとき。武器を交わらせて戦っているフォルシアの叫びが聞こえた。

「アキラ様、武器を―！」

「は！？武器なんて、どこに…、」

思い出す。フォルシアはどうやって武器を出していた？

「こうか…？『地武装（ヒューマンウエポン）』」

思い出した。あいつは何日か前に教えてくれていた。聖力が足りなくて使えなかったが。

自分が好きな武器を思い浮かべる。そう、俺の好きな武器は―、

「やっとできましたね。まったく、待ちくたびれましたよ。」

「悪かったな。やっぱり、まだ聖法よりこっちの方が戦いやすい。」

長剣。まさにＲＰＧの勇者が持ちそうな。…ああ、俺も結構中二病患者だな。
何か十字の真ん中に赤い宝石が付いてやがる。
「いくぜ！」
「武器を出したか！ならば、邪魔にならぬようその武器を奪うだけ。『魔罠（ダークトラップ）！」
「させませんよ！俺を忘れたとはいわせませんからね。」
フォルシアが『魔罠』を聖法で相殺する。
「やっと、やっとだ。」
正直言って、嬉しい。だけど、調子に乗るな。
「俺が、戦える。」
フォルシアは、後に下がった。後は出来るだけ見守るようだ。
「少しでも、足手まといなのが治る。」
本気を出せ。そうしなければ負ける。
「魔法は…そこの天使が防御するだろうな。ならば、勝負するしかないな。」
「そうですね。それが無難だと。」
「よし。エストラ。行くぜ。」
「…いい目になったな。良かろう。このエストラ本気で相手をさせてもらう。」
同時に飛び出す。俺は長剣を、エストラは槍を交わす。
カキィン―、と金属音が響いた。
相手はかなりの熟練だろう。だが、俺はゲーム大好きな中三生。
「伊達にＢ●ＳＡＲＡとかテ●ルズとかしてないからな！」
俺が使う構えや技は全てまがい物。ゲームからの受け売りだ。だけどな。
「意外とそれが防ぎにくいと思うぜ！？」
そう、これはまがい物。架空の剣技。だからこそ、それを知らない熟練は防ぎにくい。
「くぅ…っ！？」

「ずっと弟と二人で技名叫びながらチャンバラしてたからな！」
駄目中三ＶＳ弟小六のチャンバラが役に立つと思ってなかったけど。

やっと、戦えるようになった。
結局魔法はフォルシアに封じてもらっているから、一人では戦えないけど、
足手まとい、というのが少しでも解消できたから、嬉しい。
だから、油断せずに、最後まで戦う。

「意外とそれが防ぎにくいと思うぜ！？」（後書き）

作「ふふふ…あともう一回で多分最初のバトルは終わるよ！」
フ「…忙しすぎて壊れましたか？」
作「何時もながらひどいね。」
フ「思ったことを言っただけです。」
作「まぁ、これからも全力でがんばります！」
フ「変な風にまとめましたね。」

「まったく…甘いですね」（前書き）

前回から十日以上経ってました、すみません。
甘いのは私の脳内です。

「まったく…甘いですね」

「うおりゃっ！」
ゲームで学んだ技を繰り出す。
「むんッ！」
エストラは流石だ。もう俺の技についてこようとしてる。
早く決着をつけよう。そうしなければ、俺は負ける。
「はッ！」
決着を急ぐ俺が使うのは、体重をかけ攻撃できる技。
相手より上から使えば、体重だけでなく重力も威力を上げてくれる。
「うおりゃあッ！！」
これで決める。剣の先を下に向け、エストラを
貫こうとした。…そう、貫こうとしたのだ。
「…ッ、」
「どうした、少年！」
一度で止めをさすことができる、心の臓を—
「くっ…！」
しかし、繰り出した剣は狙った場所をそれ、エストラの右肩、
槍を持つ腕の方の肩へと当たった。
「ふんッ！」
エストラの肩口からは血が噴出した。
しかし、エストラは顔をしかめ、槍を落しただけだった。
「げほッ…、」
槍を落してなお、相手は、拳で俺を殴ってきた。
「アキラ様！」
フォルシアが聖法の詠唱を始める。
それよりも先に、
「うらぁああ！」

痛むみぞおちを無視して、剣を振り上げる。
「終わりか…！」
「だぁっ！」
エストラの傷口めがけて、それを精一杯…振り下ろした。
エストラの腕は、その体から引き裂かれた。
「ぐあああぁぁぁっ！」
「はぁ、はぁ…っ、あ、」
「少年、…とどめを、させ。」
「お前は、負けたんだ。だから俺の言う通りしやがれ。」
エストラに、フォルシアが回復魔法をかけてる。俺の考えを察してくれたのだろう。
「まったく…甘いですね。」
そう言いながらもエストラの血をしっかりと止めていてくれている。
「お前は、殺さない。…いや、殺せない…かな？」
「負けてなお生きながらえるという屈辱を味わえと？」
「別にそんなつもりはねぇよ。」
さっきも言ったが、俺は殺さない、のでは無い。殺せない。
いくら格好付けてもそれが俺の本音。無理なのだ。所詮、戦い慣れしていない人間には。
「俺にはまだお前らを倒し、殺す覚悟が出来てない。それだけのことだ。」
「それで俺をどうするんだ？捕虜とするか？俺を悪魔軍へと返すか？」
「仲間になれ。」
「「は？」」
ここまでは読めてなかったのか、フォルシアとエストラが同時に、率直に疑問を表す。
「正気ですか。初戦のショックで頭のネジが一本ぶっとびましたか」
「正気だしネジはぶっとんでねぇよ」

いつにもましてフォルシアの毒舌は強かった。＝、それだけ怒ってるんだろうな。
「いや、エストラとか結構悪魔って呼ぶにはもったいないな、と。」
「まぁ、正々堂々とか言ってる時点で悪魔らしくはありませんが」
言いあいなのかなんなのか、会話を続けていると、
なんか急にエストラが笑い出した。びくっとしてエストラの方を見る。
「面白い、面白いぞ少年！このエストラ、確かに悪魔にはうんざりしていたところでな！」
「「は？」」
今度は俺とフォルシアの声。
「悪魔にしては正々堂々とかそういう言葉が好きな俺は生まれた頃から色々と疎まれておってな。一つの師団長とはいえ、まだ弱い方なのに前線におかれたのはいっその事邪魔者を天使達に殺してもらおう、という事なのだろう。まぁ、俺もそれを分かっていて前線に来たわけだが。」
「…本当ですか？」
「あぁ。…よし、このエストラ、少年、お前に仕えよう。晃、だったな。そこの天使と同じようにアキラ様、とでも呼ぼうか？」
「い、いや別にいいよ…好きなように呼べよってか、仕えるとかいーから」
「そうか。なら少年、『天使の書（エンジェルブレッジ）』は使えるか？」
「俺が使えますが。」
「そうか。ならそれを使って俺に制約させればよい。」
『天使の書』、か…どんな魔法なんだろうか。
「まぁ、これで…よかった、かな？」

少しは戦えるようになったけど。
俺はまだまだ、弱い。勝てた、なんて言わない。言えない。
仲間にしたエストラは、敵にしてみれば「裏切者」

味方にしてみれば「憎い敵」
仲間を守れない奴が人類も天使も守れるはずがない。
ここへ来た意味。俺は、それを無くしたくない。

「まったく…甘いですね」（後書き）

作「…あー」
晃「また変な文章で…しかもどうしても幸せな方向にもっていきたいんだな」
作「いや、それが私の脳内だから…」
晃「最初はどうなってたんだよ」
作「エストラ死んじゃって、君なんかバーンってなってた」
晃「バーンってなんだよバーンて」
作「具体的にいえば、テ●ルズの●ビスのルー●的な感じ？」
晃「…長髪のときのあれか？ってか元ネタ分かる人、いないかもしれねーぜ？」

「どういう、ことだよ？」（前書き）

こんにちは、翡翠です。
九話目にきました！
最初の区切り？まで
あと一話です！

「どういう、ことだよ？」

「いきますよ、『天使の書（エンジェルブレッチ）』」
フォルシアの手が輝き、数秒が経つ。ボンッ、と音をさせ、現れたたのは
「え、紙？」
「唯の紙じゃないです。ここに書かれた内容にサインすれば、」
フォルシアが指で紙に何かを書いて、こちらに差し出してきた。
「えーと、『高瀬　晃はサインした後１０秒動けない』…なにこれ」
「まぁ書いてみてください。」
「…分かった。」
フォルシアがしたように、指で紙の上に文字を書く。
指からインクがでたようにも見えるが。これ。
「フォルシア、これでいいか～…うおっ！？」
動けない。まったく。
『天使の書』に書かれたように、その後十秒ほど動けなかった。
「このように、あまりにも不可能でない限りこの内容を守らされます。」
「じゃあ、それを使って悪魔に攻撃やめさせれば…。」
「…アホですか。出来ることならそうしています。」
「その『天使の書』は真名（まことな）で書かなければならないのだとこちらでは学んだぞ。」
と、エストラ。確かに戦争をするのなら相手の技、とか学んでないといけないんだろうな。
「その通りです。内容も、サインも自分の真名で書かなければなりません。その上、解除は術者じゃないと出来ませんし、解除の仕方もそれぞれ違います。」
「面倒なんだな。」
そう呟くとフォルシアは呆れたような顔をして、

「上級聖法ですから。しかも攻撃魔法ではありませんし、単純ではないのは当たり前です。」
「そういう、もんなのか。」
「ええ。さてエストラさん。貴方の真名を教えてください。」
「エストラ＝ジャラベール、だ。」
それを聞くと、慣れた手つきで内容を書き込んでいく。
「これでどうです？『エストラ＝ジャラベールは、今後一切天使達の味方となり、アキラ様と相反する気持ちでの行動は取れない。』」
「いいだろう。」
エストラはフォルシアから紙を受け取ると、
サインの欄に自分の真名を書き込んでいった。
「、ちゃんと反応しました。確かに。」
「管理はよろしく頼むぞ。」
「ええ。」
「そういえば、天使、お前に一つ聞きたいことがある。」
「フォルシアです。…なんですか？」
「お前は一体、何者だ？」
「え？エストラ？」
そう言ったエストラの目は何かを疑う目ではなく。
唯、納得したいだけのようだったが。
「どういう、ことだよ？」
「…少年、あの天使のフォルシア、だったな。」
エストラは疑問を俺にも教えてくれるようだ。
「あの者は、上級聖法を使いすぎなのだ。」
「え…」
「…」

そうだ。考えてみれば、フォルシアは圧倒的に強かった。
ハーフの育成係、なんてもっと弱くていいはずなのに。
わざわざあいつは俺を戦場に連れてきて、

俺を守りながら戦った。
エストラが驚くほどの聖力。
お前は、本当は俺についてるような奴なのか？

「どういう、ことだよ？」（後書き）

作「というわけで」
フ「何がというわけで、ですか」
作「…すんません。」
フ「まったく。いったいどこまで暴走する気ですか。」
作「いや、前々から入れようと思ってた設定をあまりフラグとか立てずにバーンと入れたかっただけで、」
フ「それが暴走ですよ！まったく、気をつけてくださいね！？」
作「はーい…（フォルシアの設定、最初は作者に近かったんだけどな…）」

「あなたも毒されましたかね。」（前書き）

今回ちょっと長いような気がします。
本当かどうかは…わかりません。

「あなたも毒されましたかね。」

「…仕方ないですね。『天使の書（エンジェルブレッジ）』」

俺とエストラ、二人の視線の先で、フォルシアはもう一度その特殊な紙を召喚した。

「それを貸して貰えるか？」

「ええ、そのためですから。」

『天使の書』を受け取ったエストラは、さらさら、と文字を書いた。

「真名は何と言うのだ？少年が『フォルシア』と呼んでいたのは聞いていたが。」

「フォルシア＝フォンバッティスタです。」

「…フォン、か…。」

俺のイメージではフォン、は貴族だ。

「ふむ。ならこれで良いか？」

「『フォルシア＝フォンバッティスタはこれから１０分、真実を話す。』、ですか。」

のぞきこんでみると、いかにも男らしい筆跡でそう書かれていた。

「１０分間何も話さない、という手もありますが。」

「ならばもう一度『天使の書』を出して貰えば良いと言う話だ。」

「それに、『天使の書』を出した、って事は話す覚悟はあるんだろ？」

別に『天使の書』を出さずにごまかしてもいいわけだ。

それをわざわざ出したのだから、覚悟はあるのだと思う。

「…まぁ、そうですね。」

「で、天使。お前は一体何者だ」

「フォルシアです。…私は、自分で言うのもなんですが…エリートだったのだと思います。」

そう言うと、フォルシアは溜め息をつく。

…っていうか、『エリートだったのだと思います』ってなんだよ。
「学校で、一年に一人選ばれる『神の加護を受ける者（グレイスオブゴット）』になったんですよ。」
「なんだそれ。」
「それに選ばれた人は、神によって力を与えられます。法力を多く使えるのもそれだけとはいいませんが…、まぁ、そういうことです。」
少し困ったような顔をして、もう一度、語りだす。
「『神の加護を受ける者』に選ばれた天使は、そのまま『大天使（エンジェリック）の守護隊（ガーディアン）』となります。」
「んじゃ、お前も入ったんだろ？超エリートっぽいじゃねぇか。」
「…最近ですが、追い出されたんですよ、そこを。」
「なんでだよ。一年に一人じゃ人数も少ないだろ？」
「まぁ、俺が邪魔だったんですよ。…性格が悪いのは百も承知でしょう？」
そう言うと、フォルシアは笑った。
…ここは笑えるところじゃねえ。なんで笑えるんだ。
確かにフォルシアは毒舌で、きっついけど。…悪い奴じゃない。
「お前の法力が強いわけも分かった。んで、俺の世話係になったわけも分かった。」
「そうですか。」
「でも一つだけ言うぞ。あんま自分を卑下すんじゃねーぞ。」
「…は？」
エストラが驚いた顔を見て笑いをこらえている。
あれ、お前しばらく空気だったよな。まーいいや。
「俺も、今はエストラも。お前の『仲間』だ。上司、とかそういう関係じゃない。な、エストラ。」
「あぁ。もちろんだ。天使、貴様は俺のことをまだ『悪魔』だからと疑うか。」
まぁ、それが普通だが、とか言いながら呆れた表情をするエスト

ラ。
「あなたも毒されましたかね。アキラ様に。」
「俺に？」
「ええ。本当に貴方は不思議な人だ。最初は最低なハーフだと思っていましたが。」
なかなか見れない笑顔を見せて、恭しく頭を下げる。
「謝ります。そして、これからもどうか俺を執事として、」
「あんま改まらないでくれよ、こっちが恥ずいから！」

例え二人に、もしくはこれから仲間になれる人たちに。
どんな過去があろうとも、俺は受け入れたい。
まだまだ弱い俺が、出来ることの一つだから。
仲間を信じて、仲間を助けて。
それが俺の目標、そして生きる道。

それは平和な朝。（前書き）

ちょっと番外みたいな感じで時々入れていきます。
「」がついていなかったら番外です。

それは平和な朝。

「アキラ様、朝です。」
「…んぁ、もうちょっと…寝かせろ…」
「分かりました。『弾(クラッシュ)…』」
俺は跳ね起きた。こいつ、『弾泡(クラッシュバブル)』発動する気だ。
「この家を壊す気かッ！？」
「そんな気はさらさらありません。でもこうすれば起きるでしょう？」
「いや、ネタばれしたらもう聞かないと思うけど。」
「…いや、」
そう呟いて現れたのはエストラ。うん、家広くて良かった。
部屋が多いから、エストラもここに住めるし。
「少年、油断するな。…そこの焔は俺よりも悪魔かもしれん。」
エストラはフォルシアを「焔」と呼んでいる。
まあ、フォルシアの髪型は赤いし、他にもエストラには感じる所があったのだろう。
「…まじか。なにがあったんだ…。」
「少し、いや、結構つらかったな…。」
エストラが遠い目をしている。つらかった、だと…？
この毒舌執事（？）フォルシアは一体何をしたんだ？
聞きたい…いや、聞かないでおこう。なんか怖い。
「エストラ、明日から早く起きようぜ…」
「ああ、もちろんだ少年。」
「早く着替えを済ませて朝食を食べに来てくださいね」
そう言うとフォルシアはそそくさと部屋を出て行った。
「ではまた後でな。」
続いてエストラも部屋から出て行った。
「ふぅ、」

少し息を吐く。そしてクローゼットの中から今日の服を取り出す。
そういえば、あの後この天界をしばらく見てまわった。
きっぱり言って、人間界とあまり変わりない。
違うとすれば、地面は雲だと言うことと、海や川がないと言うこと。
「今思えば…水とかどうしているんだ？」
後でフォルシアに聞こう、と考え、服を着替える。
そして顔を洗いに行き、その後朝食を食べにと一階へと下りる。
「やっときましたか。エストラさんはもう降りてきていますよ」
「悪い。」
「ふむ、焔。お前は料理も得意のようだな、練習でもしたのか？」
「…少し母親に。あとは執事になるために、とレシピを渡されたので。」
渡されて、それで作ってあんな美味いのか。この間から食べてたけど。
「なぁなぁ食べていいか？」
「先に挨拶しなさい。子供ですか。」
…まるで躾の最中の親子だ。そこまで子供じゃねぇ…
とりあえず、その突っ込みも置いといて、三人で、
「「「いただきまーす」」」
と挨拶する。そして、思いっきり食べ始める。
「アキラ様、エストラさん、料理は逃げませんよ。」
「いや、だって美味しいし～。」
「兵士と言うものはあまり料理に力を入れていられないからな。こんな美味い料理は久しぶりだ。」
それを聞いて、フォルシアがちょっとだけ嬉しそうにした。
その風景は、平和な一日の予感がする、朝。

それは平和な朝。（後書き）

今回の平和な朝、次とその次の番外、昼と夜の話は繋がってる予定です。
どれだけ間に本編が入っていてもある一日の話なんで。
もし本編で仲間が増えても、昼と、夜の番外には
この三人しか出てきません。はずです。

「『星破墜牙斬』、なんてどうだ？」（前書き）

更新のペースを戻してます（汗
あんまり間が開かないようがんばります

「『星破墜牙斬』、なんてどうだ？」

「うりゃあッ！」
「力任せに振るな、少年ッ！」
カキンッ、と剣と槍がぶつかり合う。
エストラの放つ槍の攻撃はとても重い。やはり、あの時フォルシアの助けが無かったら。
エストラには勝てなかっただろう。まぁ、自分でも勝った、とは思えないが。
「胴ががら空きだ！」
「胸を守れ、殺されてしまうぞ！」
エストラに剣術を教えてもらい、フォルシアに法術を教えてもらう。
そんな日々が続いていた。
「くっ…ていっ！」
「甘いッ！」
ガン、と重い音が響き、俺の剣は槍に弾かれ、飛ばされてしまった。
エストラの槍はぴたりと俺の喉に突きつけられている。
「負けた…、降参だ」
「ふむ。やはり実戦は経験が多いからな。仕方が無い所はある。」
「そうなのか。だけど、俺は強くなりたい。」
「まぁ、その根性と向上心があれば強くなれるだろう。ああ、そうだ、少年。」
思い出した、と言う風に声を掛けてきたエストラ。
なんなんだ？
「『飛翔（フライ）』、があるだろう？」
「ああ、『飛翔』。それがどうかしたか？」
「それを使って新たな戦術、と言うか…なかなか使いにくいのだが

な、」
「『飛翔』と剣技を合わせる…？」
「そうだ。さっきも言ったがなかなか使いにくいがな。」
「空を有意義に使うのか。まぁ、そうすれば色々と有利だろうしな。」
「ならば少しやってみるからな。ここから離れておけ。」
そう言うと、エストラは『飛翔』を使い、太陽へと向かっていく。
速度はかなり高く、エストラはすぐに見えなくなった。
「高い…」
ちかちかするが、目を細めれば何とか見えた。
黒い、エストラの影が大きくなってきた―
「やっべ、そういう事かっ！」
「…はッ！」
ドンッ！雲（？）が舞い、衝撃がくる。
目の前が晴れると、そこには、地面―雲に深々と刺さった槍と、
それを持つエストラ。
「見ていたなら分かると思うが、あまり使えない技だ。一人での戦いでは使えないな。」
「時間も居るし、なにより隙だらけだからだろ？」
「そうだ。だが、今お前は焔も居るし、俺もいる。時間を稼ぐ間に使うことも可能だと言うことだ。」
「なるほど。…なあ、エストラ。その技って名前とかあんのか？」
「無いぞ。」
「おお。なら俺につけさせてくれよ！うーんと、」
折角なので、技名を考えてみることにした。
ちなみに、俺のネーミングセンスは悪い。あと中二病。
「『星破墜牙斬』…なんてどうだ？」
「まぁ、良いのではないか？」
我ながらゲームとかアニメの影響を受けている名前だな。
エストラも良い、って言ってるし、まあいっか。

少しふざけながらの特訓。だけど、ちょうど良い。
無理やり特訓なんて俺には合わないし。
少しづつ、少しづつだけど強くなれる、かな？
だから、こんな毎日を俺は楽しんでいたんだ。

「『星破墜牙斬』、なんてどうだ？」（後書き）

晃「なぁ作者。」
作「なんでしょう。」
晃「本当に中二病…いや、厨二病なのはお前だろ。」
作「あ、ばれた？」
晃「まぁ、作者だし分かる。あの技名考えたのもお前だからな。」
作「分かってるって。だからこうしてここで話してんでしょ？」
晃「分かってるなら良い。あんまり症状を悪化させるんじゃねぇぞ。」
作「はーい。」

「この声の主は、」（前書き）

よく分からなくなってきました。
大変な事になってきてます（汗

「この声の主は、」

「大変です…！天界政府に呼ばれました」
「はぁ？なんでだよ？」
よく分からないが、政府はだいたいどこも同じ組織だろう。
俺の住んでた世界の政府と同じ、と言うと少し心配だが。
「エストラさんの話だそうです。アキラ様と俺と、エストラさんの三人で来いと。」
「マジかよ…！」
さすがに逆らうわけには行かないだろう。
少し嫌な予感はしたが、呼ばれた場所―人間界で言えば国会議事堂のような場所へ行くことにした。
嫌な予感は、当たるものだ。意外と。
「天界に味方するものでありながら、悪魔を仲間とするのか？」
エストラは別の場所へと連れて行かれた。
俺の周りには、多分政治家的な奴らが居て、目の前に明らかに嫌味っぽい眼鏡が立っている。
嫌味と毒舌の違い？毒舌の方がまだ救いある。…いや、あんま変わらないけど。
「…それの何が悪い？」
「アキラ様、」
フォルシアが俺を止めようとする。
でもな、我慢の限界なんだよ。同じような質問されて、何１０分ここに居た？
それに、馬鹿にされたようで嫌だ。俺も、フォルシアもエストラも。
「頭固ぇようだから教えてやるよ！悪魔にだって良い奴はいんだろ。逆に天使にだって悪ぃ奴は居る。唯俺は気の合う奴と仲間になっただけだ。」

「我等天使を愚弄する気か？」
「アルト、俺が『天使の書（エンジェルブレッジ）』を発動している。」
諦めたのか、フォルシアは庇ってくれている。しかしフォルシア、知り合いか？
「…フォル、問題はそこじゃないんだ。」
なんかあれ？本当に知り合いなのか？
「アルテミス。何も答える気がそいつらに無いのなら、あの部屋へ連れて行け。」
「まさか、悪魔とはいえ、話がきちんと聞けてないのに連れて行ったのですか！？」
おお。なんか嫌味眼鏡が押されてるけど…悪魔って、エストラの事か？
「連れて行けよ。エストラのとこ。」
「そいつらも言っている事だ。アルテミス、連れて行け。」
「…は。」
アルテミス、と呼ばれた天使に着いて行くと、その部屋の様子が、窓から見えた。
その部屋の中には、何故か縛られたエストラ一人しか居なかった。
「フォル、あまり反抗しないでくれ…じゃないと、俺は…！」
「まさかアルト…この部屋はッ！」
「やれ。」
アルテミスに命令していた天使が何かを命じる。
「ぐ…ぁッ！」
部屋の中に閃光。同時に、エストラが倒れる。
何があったかは、すぐに想像できた。
「てめぇ…ふざけんなッ！」
「アキラ様、かないません、やめてください！」
身動きの取れないエストラを、あいつらは攻撃した。
絶対に、許せねえ。
「『地武装（ヒューマンウェポン）』ッ！てめぇら全員、土下座して謝りやがれッ！」

「この人数に勝つつもりか！愚か者めが。」
命令した奴はかなり立場が高いようだ。その一言で、一気に天使達が戦闘態勢に入った。
「やってやるぜ…！」
「全員、掛かれ！」
俺と天使達が同時に走り出した。
「やめぬかッ！！」
突然響いたのは、野太くあり、凛とした声。
「この…声はッ！」
「皆の者、頭を下げよ！」
「は？…誰だよ。」
声に、圧された。剣を落し、唯、俺は立ちすくんだ。
「アキラ様、この声の主は―、大天使様です！」
「な…っ、」

唯のハーフ、俺の暴走。
それを止めるために彼、大天使は現れたのか？
そう、思うのは傲慢なのだろうが…、
謎はきっとすぐに解けるだろう。
…うん、きっと。

「この声の主は、」（後書き）

フ「…展開速いですね。」
作「でしょ。」
フ「褒めてませんよ。アルテミスって新キャラ出てますけど、」
作「出てますけど？その後は？」
フ「最初と途中からでキャラ変わりすぎでしょう…！」
作「てへっ★」
フ「まったく可愛くありませんね。」
作「すんませんでしたー」

「礼を言う。」（前書き）

はーいカオスです。すみません。

「礼を言う。」

「まずはどちらも静まるがよい。」

さっきまでの喧騒、そして殺気がピタリ、と止む。

圧倒的な威圧感。誰かも分からなかった俺でさえ黙らずにはいられないほどの。

「様子はすでに見ておる。しかし、そこの少年。聞きたいことがある。」

「な…なんだよ…！」

そんな言葉しか出てこず、大天使とやらが少し眉を動かした。

少し、やばいか？と思ったが、すぐに表情を戻した。

「貴様、大天使様に無礼な！」

「よいのじゃ。今一度、聞きたいことがある。」

「何故、悪魔を味方とした？」

「さっきも言ったが、気があった、良い奴だから。それだけだ。」

後に残る気まずい沈黙。破ったのは、大天使。

「フォルシア、お前が認めるのにも頷ける。悪魔…いや、我らの味

方、エストラを放しなさい。」

「し、しかし大天使様！」

「その者一人逆らった所でどうにかなるのかそなた達は。そこの少年の言うとおりだ。我らは、少し頭が固かったのじゃ。」

「…はっ！」

しぶしぶながら、しかし従う権力高そうな天使。

「すまなかったな、フォル。」

「別にお前が悪いわけじゃないだろう？アルト。」

二人はなんか友情再確認してるし。

「少年。」

俺は大天使に呼ばれた。

「すまなかったな、友人への攻撃を止められなくて。」

「いや…あんたが下りてこなかったらエストラもフォルシアももっと危なかったと思う。あれは俺の暴走だから…許してくれ。」

「…ふむ。流石は―」

「？」

「あ、いや、なんでもない。これからも我らの為にがんばってくれるか？」

「もちろんだ。」

流石は、と言う言葉の後、大天使は何を言いたかったのか。

俺は、聞けなかった。

「エストラさん！」

その声が響き、それを聞いた俺は、声の方向を向いた。

「大丈夫か！？」

「まあ…なんとかな、聞いていたぞ少年、焔。礼を言う。」

大丈夫、と言いながらも足はふらついていて、天使に支えられている。

「この方は治るまで病院で見ます…すみませんでした。お帰りください。」

そう言われ少しためらったが、信じてもいいと思った。

エストラを見送って、二人で帰っていった。

「それにしても、大天使って良い奴なんだな。」

「天界の住人は、皆信頼してますよ。今日の事だってほぼ奇跡です。

」

「…エストラ、大丈夫だよな？」

「大丈夫でしょう。我が天界の病院はあてになります。信じてください。」

久しぶりの二人だけの家は、とても広く、そして静かで。

少しエストラのことについて不安は高まった。

「まぁ、エストラ丈夫だし…うん、大丈夫だよな。」

「心配しすぎなのですよ。それではエストラさんに逆に心配されてしまいますよ」

「うっせー。」

昔のような、そんな二人だけのやり取り。

だけど、それが心を和ませてくれた。

俺は皆と仲間になりたい。そのためには、何をすればいいんだろう。

馬鹿な俺は何も分からないから…いつも全力で、がんばろう。

「礼を言う。」（後書き）

エ「後書きに参戦するのはいいのだがな。」
作「はい…」
エ「何も俺が全然活躍していない時に初参戦、と言うのは・・・・。」
作「まじすんません。」
エ「少しショックだぞ。色々扱い酷くて。」
作「いやー、オッサンキャラ好きなんですけどね。」
エ「（オッサン…）」
作「活躍させまーす！」

「親友の名前だよ。」（前書き）

フォルシアの設定がどっかぶっ飛んでいる…！
性格も一話と今じゃ全然違いますね（汗

「親友の名前だよ。」

「練習…するか。」

次の日。エストラが不在のため、俺は『地武装（ヒューマンウエポン）』で剣を出し、外へ向かった。

「…1、2、3…」

まずは素振り。まあ実戦稽古はできないし、何をするか考えないといけない。

「あ！」

何故か今思い出した。

「家に何も連絡入れてねぇ！」

剣をしまい家（天界の）に駆け込む。

フォルシアは…あ、居た！

「フォルシア！」

「なんですか…？騒がしいんですが」

「ここって人間界の上にあるだけなんだろ！？異世界とかじゃなくて」

「当たり前です。」

なら、そういうゲームとかと違って…

時間の進み方は人間界と一緒！

何日帰ってないといや、何週間帰ってないと…

約二週間…ぐらいだよな。

「親に連絡入れねえと…って信じてもらえねえ！」

「騒々しいですよ。貴方の家族にはもう連絡を入れてます」

「どうやって？」

フォルシアから告げられた言葉に少しだけ安心する。

「貴方の息子さんは預かっています、安心してください、と。」

「誘拐犯の文章じゃねえか！」

「冗談ですよ。きちんと連絡しています。あなたは『ハーフ』なのですよ？」

そういえばそうだった。親のうちの少なくともどちらか一人…

運がよければ二人共知っている。

「…ああ、ごめん、分かった。」

「なら稽古を続けられてはどうです？」

「ああ。」

その言葉に今度は本当に安心し、外へ向かおうとする。

「…充（みつる）と楓（かえで）はどうしてるんだろうな、」

ふと、親友の顔が浮かぶ。

「誰ですか、それ。」

小さな呟きだったのに、フォルシアはそれを聞き逃さなかったようだ。

「ああ、俺の…親友の名前だよ。」

お調子者で、しょうがない奴だけど。優しくて憎めない充。

いつも笑顔で、何故かエセ関西弁を使って皆を笑わせてくれようとする楓。

「今頃、どうしてるんだろうな。」

「…ええ。そうですね。」

「ごめん、変な空気になっちゃったな。外、出てくる。」

「はい。」

俺はしばらく会えないだろう親友の顔を思い出しながら、外へもう一度向かった。

＝Ｆ・ＳＩＤＥ＝

「充と、楓…か。楓はどこかで見たような名前の気がするな…苗字も分からないし、気のせい…？」

アキラ様が、さっき言った名前。なんとなく聞き覚えがあるような。

親友だからと言って危ないからまったく戦えないハーフでもなんでもない人は連れて来れない。

悪いかもしれないけど、それがアキラ様のためにもなる。

もし連れてきて、その親友が死んだらどうなる？

親友を庇ってアキラ様が死んだら、その親友達は、どう思う？

「まあ、こっちは戦場だし…」

執事口調でない、何時もの口調に戻って呟く。

やはり、この口調のほうが楽だ。

「…この口調とか立場とかきっぱり言ってめんどくさいんですけど…それを言ったらアキラ様は絶対止めろとか言うだろうし…上司か

ら受けた命令と主さんから受けた命令ってどっちが重いんだろー。」

…ああ、変なことで悩んでしまった。

あなたは友の命と自分の命…どちらを救うかと問われれば

迷わず友の命、と答えてしまうだろうから。

あなたの世話役って言っても結構きついんですよ？

「親友の名前だよ。」（後書き）

晃「充と楓…ねぇ。」
作「どっちも男子だから安心しな☆」
晃「何にだよ。よく今日思いついた人物を話の中にいきなり入れたな。」
作「すごくね！？」
晃「褒めてねえよ。と言うかこれって伏線なのか？」
作「…多分…ね。」

「この馬鹿主！」（前書き）

だんだん文章が…
下書き、ネタ箇条書きだけでもしとこう。

「この馬鹿主！」

＝？？？　ＳＩＤＥ＝

「あの馬鹿…勝手に居なくなりやがって…！」

「両親に聞いても大丈夫、の一点張りだし、警察も動いてない。…誘拐の線も事故の線も無いから多分安全だろうとは思うけど…心配だね。」

「なんで警察が動いてないとか知ってんだよ…？」

「ふふ、秘密。」

にっこりと笑うあいつは、何か秘密を隠しているようだ。

「教えろよ。それがあの馬鹿に繋がるって言うならなおさらだ。二人で行こうぜ？」

「…ああ、それが良いのかもしれないなあ…。」

あいつは少し考える表情になった。

何秒か考えて、そしてあいつは俺に、告げた。

「色々と覚悟が必要だけど、いい？」

「――…ああ、いいぜ。二人であの馬鹿を迎えに行こう。」

＝Ａ　ＳＩＤＥ＝

「はくしゅっ！」

誰かが噂話でもしているのだろうか。充と楓、とか？

まあ、早く色々止めて帰るだけだな。

「風邪をひいて戦えない、なんてことにならないでくださいよ」

「ん、分かってるって…」

そういえば、一つ思ったことがある。

「なあ、フォルシア、天界って…人間界に繋がる道とかあるのか？」

「あるのはありますよ。一日に一時間程度しか開きませんが。」

「へえ…。」

「天使が居なくても人間だけで登り下り出来るのはその道だけですね。まあ、唯の人間にはあまり意味がありませんが。見つけられないので。」

「絶対に、か？」

「ええ…まあ。知り合いに天使がいるか、話を天使から聞いたものがいるならまた別ですが。」

「あのさ…フォルシア、俺、そこ知ってるかもしれない。」

「え？教えてませんよね？」

小学生三年か四年ごろの話だ。俺達は、確か…

「一度、天界に来たことあるかも知んない…！」

「は！？」

「いや、丁度六年ほど前なんだけどさ、」

俺は、六年ほど前の話を、フォルシアに話した。

俺達の町には「聖社」なる者があった。そして、伝説があった。

『夜中の聖社に酒を奉り、二刻以内にその裏山にあるもう一つの社に酒を奉れば、』

『天神への道が開かれるだろう。』

俺達はその伝説を実践した。他にも実践した奴らは居るらしいが、成功したなんて噂は聞かなかった。だけど、俺達は。本当に、真夜中それをした。

そしたら。

ぱあっ、となんか光ったと思ったら、俺達は全く知らない場所に立ってた。

下は雲だし、なんか空飛んでる人たちがいる。驚いたよ。

その時、呆然と立ち尽くしたんだ、俺達は。

その後、でっかいオッサンが話しかけてきて、事情を話して、戻してもらった。

親父とお袋にはこってり絞られたけどな。

「…それが本当なら…！」

「なんだ？」

「この馬鹿主！なんで今更思い出すんですか！？二人がここに来るかも知れないじゃないですか！？」

「…あー！」

昔々の話。それが、今に繋がってるなんて…

その時の俺は、思いもしなかっただろうな。

まだ、その話には秘密がある。

今の俺でさえ気付いていない、秘密が。

「この馬鹿主！」（後書き）

フ「この馬鹿作者！」
作「サブタイトルと同じ怒り方しないでよ！」
フ「馬鹿なのだから仕方ないでしょう！？」
作「なににそんなに怒ってるの～」
フ「ら、楽観的な…前書きですよ、前書き。」
作「ああ…」
フ「ああ…じゃありませんよ。ネタぐらいメモってここに打ち込み始めなさい！唯でさえ変な文章なんですから…」

「覚悟はあるのか？」（前書き）

かなり間が開いてしまいましたが、
次話投稿です！

「覚悟はあるのか？」

「フォルシア、行くぞ！」

「今から行ってもだめです。とりあえず、連絡して今夜まで待ちましょう。」

「なんでだよ？」

「真夜中にしか道は開かないのです。もう来ているとすれば、もう出口の場所には居ないでしょう。もしくは…今日以降の真夜中に来るしかないですから、今から行っても意味ありません。」

正論だ。落ち着くために椅子に座った。

「では私は少し問い合わせてきますから。そこで待っていてください。」

「ああ。」

しばらく待っていると、ドアが開いた。

「どうだっ…た、って…」

そこに居たのは、フォルシアではなく、そして三人だった。

「よーう、晃。」

「やっほー、晃。」

「お前の事を聞いていたから連れてきたぞ。少年。」

「エストラ、充、楓――――！？」

三人の登場は俺を絶句させるには十分な衝撃を与えた。

「フォルシアあああ！！」

「なにごとですか！？アキラさ――、」

そのままフォルシアも固まった。

当たり前だよな。

そこに居たのは、エストラと、充、楓と言う良く分からない組み合わせ。

多分俺の反応でエストラ以外の二人は誰かもフォルシアには解ったはずだ。

「エストラさん！今日帰ってくるとか聞いてませんけど！？」

「言ってないからな。驚いたか？」

「当たり前ですよ…で、その二人は？どこで会ったんです？」

「帰り道。少年のことを探していたのでな。」

「もし敵だったらどうするつもりだったんですか？」

もっともな質問だ。
「こんな少年と同じ年頃の子供二人にやられはせんと思ったのでな。」
「でもアキラ様にやられてましたよね。」
「…」
「フォルシア毒舌ストップうぅぅ！」
エストラ落ち込みかけてるから！
なんとか威厳保とうと平気な振りしてるけど！
「…まあ、とりあえず…この二人を帰しましょう。明日にでも。」
「そうだよなー。つー訳で戻るんだぞ。」
「「え、やだ。」」
うん、そーだよな。戻ってくれるよな…ってえ！？
「なんでだよ！？」
「こっちの世界の方が面白そうだし。」
と充。

「僕達三人じゃないと楽しくないしね。」

と楓。

「な…楓、それって暗に俺のことけなしてる！？」

「暗にじゃなくて明確にけなしてるんだよ。」

「…漫才はやんなくて良いから！帰れよ！ここは危険なんだよ！」

「なら、晃も帰ろう。」

「え、」

「そうだぜ。お前も俺と同じ唯の一般中学生だ。」

違う、

俺は。

「違うんだ、俺は…。」

「…『飛翔（フライ）』」

急に、ばさっ、と羽の音が響いた。

「充に、楓と言ったな。どうやら俺もまだまだのようらしい。」

『飛翔』を唱え、そう呟いたのは、エストラ。

「お前らが人間だったことに気付かないとはな。道は天界にも繋がっていたのか…。」

「だから、」

「問おう。覚悟はあるのか？俺の背に今、悪魔の翼が生えているだろう。」

「…悪、魔？」

その問いに、最初に反応したのは、楓だった。

俺は、お前らを危険な目にあわせたくは無い。

でも、俺には、いつも話したい、ふざけあいたいなんて気持ちが渦巻いて。

俺は、どうすれば良い？

「覚悟はあるのか？」（後書き）

エ「新キャラ出てきたな」
作「そっすね」
エ「元気ないな」
作「いつものことですよ」
エ「なんかだんだんとこっちまでさびしくなって来るんだが」
作「……だって、学校が忙しすぎて」
エ「言い訳をするな」

「地武装」（前書き）

さて、そろそろ久しぶりのバトルパートへ向かいます！

「地武装」

「怖いか？」

「……いや、僕は大丈夫」

そう言う楓だが、驚きの表情は隠せてない。

「なんで天使が居るような所に悪魔が居るのかはわかんねえけど、別に平気だぞ」

充はそう言うと、

「俺達は、一回ここへ来たことあるからな。なあ、晃？」

「だけど、あの時とじゃ事情が――」

「天使と悪魔が戦っているから？」

「楓、なんでそれを！？」

俺の言葉をさえぎって言ったのは、フォルシアでもエストラでもなく、

事情を知らないはずの楓だった。

「ある人から聞いたからね。そんなに怖い顔しないでよ」

「ある人とは誰です？」

「ほら、僕達が昔この世界に来た時に会った人」
「おま、楓！もしかして俺がトイレに行ってる間に！？」
「そゆこと」
こっちの世界のトイレ、いけたのか。
こっちに飛んできたばっかりで？
相変わらず空気クラッシャー的な存在だな、充……ってそうじゃねぇ！
「知ってるなら分かるだろ！？こっちは危険なんだから帰らせるぞ」
「さっきも言ったけど帰る気はねえな。お前も一緒なら話は別だけどな」
「僕も同意見だよ。エストラ、って言ったっけ？」
楓はそうエストラに問いかけた。
そして。
「武器とかあるよね？それ、貸してよ」
「んじゃ、俺はそっちのフォルシアって子から」
「まあいいが、何をする気だ？」

「仕方ありませんね」

それぞれ二人から武器、レイピアと槍を借りた充と楓はそのまま、

その武器をこっちに向けてきた。

「は？」

「早くお前も武器出せよ。出せんだろ？」

「一対一じゃちょっと微妙だからね、二人で戦わせてもらうよ」

充は少し悪戯っぽい笑みを浮かべ、

楓はにっこりと微笑んでいる。

まさか、本気か！？

「待て待て待てッ！！お前ら何を！？」

「分かるでしょ？これが僕等の決意かな？そーいうこと」

二人は本気だ。仕方が無い、戦って、諦めをつけさせよう。

「『地武装（ヒューマンウエポン）』」

俺は、自分の武器を取り出した。

中で戦うと大変なことになるだろうから、勝負は外で行うことと

なった。

「ってかお前も魔法をつかえんのな」

「魔法ではありません、聖法です」

「ごめんごめん、聖法な」

俺と同じようなツッコミをされながら充は武器を構えた。

武器は、フォルシアのレイピア。

「えーと、これって聖法だっけ？ありなの？」

「ありだな。それが戦いだ」

「ちょっと厳しいけど、二人だからいいかな？」

そう問いかけて、少し困った顔をした楓も、武器を構えた。

武器は、エストラの槍。

油断は、出来ない。

「アキラ様？準備はよろしいですか？」

「ん……ああ、いいぜ」

「そんな調子では勝てる物も勝てませんよ」

「うっせー」

いつもどおりの会話を交わして、俺も武器を構えた。

さあ、戦闘開始だ――

「地武装」（後書き）

晃「今回かっこいいセリフ一つもいってねぇ……」
作「どっちかって言うと、って言うか絶対充と楓のほうがかっこよかった」
晃「お前が書いたんだろうがッ！」
作「まーそうだけどね？」
晃「開き直りやがった！？」
作「まあまあ。充は重大発見するし、楓は重大人物だから期待してね」
晃「誰もこの作品に期待なんかしねえよ」
作「ですよねー」

「あなた馬鹿ですか」（前書き）

どんどんカオスに……！

「あなた馬鹿ですか」

「じゃあ、行くから」

「こっちだって。『飛翔（フライ）』！」

風を巻き込み、翼を広げる。

そして、一気に飛び立つ。

「あれ、聖法って言うやつか？」

「そうですね。『飛翔』、聖法、魔法ともに使えるものなら最初に覚えるＬＶの物です」

「俺達も使えたりするの？」

「貴方が――、後で言います。戦闘に集中してはどうです？」

その言葉に苦笑いして、充はこっちを向いた。

「充、俺のことなめてる？」

「いーや、別に？」

あ、これはなめてる。絶対勝つって……

遠慮はしない。怪我しない程度に聖法と剣で。

「『風圧（ウィンド）』」

木を倒す程の圧力までは出さずに、少し控えめに出す。

「まずはお前からだ、充！」

「分かってるよ」

「――は？」

「お前はいつもそうだよなー」

充は予想していたと言ってるのか？

俺の行動を。

「ま、って言っても楓から教えてもらったんだけど」

「お前、いっつも俺等にキれたりする時、」

「俺から殴るんだよなー。まったく悲しいぜ？」

そういえば――確かに、そうかも知れない。

それを予測していたというなら。

「くっ！」

後を振り向く。後には、木が何本も繁っている。

飛び出してきたのは、楓。

かなり高い位置から飛び出している。

まさかお前、落ちるつもりか！？

「くらってほしいなぁ」

楓は、槍をこっちに向けて思いっきり投げた。

その槍は難なくよける。だが。

「楓！！」

楓が落ちていく。

絶対に無事ではすまない距離だ。

楓を助けようと、俺は武器を投げ捨て羽ばたく。

「うん、充、計画どうりかな？」

なんとか楓をキャッチした、が。

楓の口から出たのは、そんな言葉だった。

その意図を掴めないまま、楓を抱えながら長く飛ぶことが出来ない俺は、

地へと下りた。

「……アキラ様、あなた馬鹿ですか」
「はあっ？」
フォルシアの言葉に後を向くと、迫ってくる充。
「ちょ、フォルシアちゃん、言うなって！」
「誰が『フォルシアちゃん』ですか」
少し乱暴だが、けがをしないように楓を急いでおろす。
今度は、二人が良く見える位置へ。
「あー！折角のチャンスがあああ！！」
「あっぶねえ……」
「そこまでだッ！！」
悔しがってる充に、起き上がってくる楓。
その時、響いたのはエストラの声だった。
「覚悟は、あるようだな」
「ちょっと待てよエストラまだ決着は」
「そうですまだついていませんよ」

エストラの判定に、俺とフォルシアは不満の声を上げる。
「少年よ、武器はどうした」
「武器は……って、あ」
武器は、今俺がいる位置からかなり遠くに転がっている。
「少年が武器を落した後、あの少年が武器をけった」
「いや、俺には聖法が」
「焔の助けがあって気付けたのだったな、奇襲に」
「う」
「んじゃ、俺らここに居ていいのか！？」
「ああ。だが、一人では少年には勝てないだろうからな。特訓だぞ？」
「いいよ？ここに居られるならね」
「勝手に話を進めるなあああああ！！」
嬉しいのか怒ればいいのか、悔しいのか分かんねえよ！

とりあえず、勝手に話を進めるな！

「あなた馬鹿ですか」（後書き）

作「ふー、終わった」
フ「これ以上キャラを増やしていいんですか」
作「お、はぶててますね」
フ「誰が。後で後悔しても知りませんから」
作（レアな光景だ。写真で取っとこう）

「それはないな」（前書き）

話がどんどんカオスな方向に……

「それはないな」

「フォルシアちゃん、フォルシアちゃん」

「誰が『フォルシアちゃん』ですか」

何分か前に聞いたようなやり取りを聞きながら、溜息をつく。

「おい、エストラ、本気か！？　」

「ああ本気だ。時に、少年、あの二人は同じ歳なのだろう？　」

「は？　あ、そうだけど」

「ならば、晃」

「へ？　」

急に俺の名前を呼んできた。

エストラは俺のことを少年と呼ぶはずだが。

「急になんだよ、『少年』って呼ばないのか？　」

「充と楓が増えたからな。いつまでも少年だと変だろう」

このエストラ、（弟子が増えることに）のりのりである。

「お前、最初っからあの二人ここに居させるつもりだったんじゃな

いのか？　」

「それはないな」

即答。そこまで甘くはない、と言うところか。

「まだまだだが、育てば強くなる二人だな。それが分かったから、ここに居ることを許可した」

「そうか」

「それに、楓は何か……」

「楓がどうした？　」

「ああ、いや、なんでもない」

小声で呟いたエストラの言葉に、疑問を返したが、エストラは答えを濁した。

エストラが認めたのだ、不安ではあるが、確かに何かあるのだろう。

「フォルシアちゃーん」

「あはははは」

二人の居る方向に目を向ける。

充はなんかフォルシアを『フォルシアちゃん』なんて呼んでフォ

ルシアに殺されかけてるし。

楓はそれを見てのんきに笑ってるし。

かなり心配ではあるが、大丈夫だろう。

……多分。

「ってかお前ら！親はどうすんだよ！？　」

「ん、大丈夫」

「お前んちに連絡してどうにかして貰ってるし」

「学校は」

「晃が重病にかかって遠くで療養中なので俺達二人が無理矢理ついて行って看病中」

「無理ありすぎだろ」

「いやでも先生には許可もらえたみたいだよ。母さんたちにも」

呆れたような溜息を吐く。

それで納得した先生と二人の家族にも驚きなのだが。

「だから、まあ大丈夫」

「分かったよ。とにかく無茶はすんな。それだけは守れ」

「「はーい」」

返事をしてまたはしゃぎだす二人。

もう一度、今度は充だけをこっそりと呼ぶ。

そして、他三人から離れて、声を潜めて話す。

「おい、充」

「なんだ？　」

「おまえ、フォルシアのことなんで『フォルシアちゃん』って呼んでるんだ？　」

「は？　」

「お前気に入った子にしか『ちゃん』づけしないだろ？ってか男子は全員呼び捨て」

「ああ、だから、普通だろ」

「は？　お前そういう趣味してるのか？　」

「そういう趣味ってなんだよ」

「いや、フォルシアって男だし」

「はぁ！？　何言ってんだお前！　」

「お前こそ何言ってんだよ！」

かみ合っていない話に苛々して、声が段々と大きくなっていく。

その声に驚いたのか、三人が俺と充の方に振り向く。

「どうしたんですか？」

フォルシアのその問いに、充は嬉々として言った。

「フォルシアちゃん、あんたって女性だよなぁっ！？」

「！？　何、を」

充の発言は、俺達に大きな衝撃を与えて。

だけど、その問いに対するフォルシアの戸惑いは。

フォルシアの過去に、関係あるのかもしれない。

「それはないな」（後書き）

エ「作者よ」
作「何？」
エ「お前は、最終的に俺をどんなキャラにするつもりだ？」
作「分からん」
エ「……（だめだこいつ）」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9596u/

天使と悪魔と、毒舌執事。

2011年11月5日18時09分発行